

## 推 薦 理 由

推薦者氏名 松澤 昭、渡辺 治

学長候補者の氏名 : 益 一哉

候補者は、本学博士課程修了後、東北大学に助手、助教授として18年間勤務した後、2000年6月から本学に教授として勤務している。三島良直学長のもとで推進している教育改革、研究改革、ガバナンス改革の中で、候補者は2016年4月から科学技術創成研究院院長として、本学の運営の一翼を担っている。候補者の広い学識と人望に裏付けされた行動力により、幅広い研究分野、異なる研究スタイル、個性豊かな研究者の集まる科学技術創成研究院を束ねており、円滑に運営を進めていることは高く評価される。候補者は、研究院運営に当たり、第一になすべきは研究に集中できる環境の構築であると認識し、執行部の支援を受け、研究院の施策の企画立案に研究企画運営専門職（URA, University Research Administrator）を活用し、研究院において、产学共創プラットフォーム共同研究推進プログラム（OPERA）やNEDO大型プロジェクトを提案し、それぞれ採択に繋げており、その企画運営手法は研究院全体に拡がりつつある。これらの例からも明らかなように、候補者は対話を通じて現場の特色や特長を把握し、施策の企画立案から実行に繋げる運営手法を実践している点は高く評価されているところである。

**【候補者の教育・研究歴】** 候補者は、これまで一貫して半導体集積回路技術に関連する教育、研究に携わり、材料開発から、半導体製造プロセス技術開発、集積回路設計技術とワイヤレス通信技術への応用研究などを行い、最近は超高感度加速度センサ開発と機械学習に基づくその神経性難病の早期診断応用なども手がけている。すなわち、エレクトロニクス分野において一貫して非常に幅の広い研究分野を切り拓いてきたことが候補者の特徴である。また、異なるマインドをもった研究者との対話に基づく相互理解は、産業界との共同研究の推進に繋がっている。これらの研究マネジメント経験は、多様性が求められる本学の教育と研究を推進すべきリーダーに根幹的に必要なものと言える。

**【研究業績と若手育成】** 候補者は、電子情報通信学会業績賞、電気学会業績賞などを受賞しており、その学術成果は高く評価されている。また、応用物理学会、電子情報通信学会、電気学会においてフェローとして表彰や認定されていることは、研究分野の多様性と長年の地道な基礎研究、産学連携で推進した研究成果、広い学界での活動などを裏付けるものと言える。さらに、指導担当した学部学生や大学院学生が、学内外の研究賞を受賞し、また共に研究・教育に当たった若手教員や特任教員が学内外へ昇任転出していることは若手人材育成という観点においても十分な実績があると評価できる。

**【外部資金など】** 候補者は、科学研究費補助金基盤研究(A)他、NEDO（大学発事業創出実用化研究開発事業他）、総務省 SCOPE（戦略的情報通信研究開発推進制度）、JST-CREST（戦略的創造研究推進事業チーム型研究）などに研究代表者として採択され、また共同研究講座（2件）や米国企業を含む15社以上の民間企業との共同研究も推進している。さらに、2004年以降、アジレント・テクノロジー（株）（現・キーサイト・テクノロジー合同会社）の協力を得て、寄附講義「高周波計測特別講義」を実施していることは昨今の产学連携教育の端緒とも言えるものである。

**【学会での貢献】** 候補者は、電子情報通信学会エレクトロニクスソサエティ会長、応用物理学会副会長などを歴任しており、2017年度からは工業界との結びつきの強いエレクトロニクス実装学会会長を務めている。それぞれの学協会の特徴を活かしつつ、学界の発展に向けて大いに貢献している。候補者の多様性を重んじる人柄や秀でたマネジメント力がこれら多くの学協会運営を任される大きな理由になっていると言えよう。

**【社会的貢献】** 候補者は自身の高潔性と公平性を求められる各種の審査委員、例えば、日本学術振興会科学研究費委員会専門委員、NEDO技術委員、総務省電波有効利用促進型評価委員会委員等を長年に亘り歴任し、NEDO「ドリームチップ技術開発」においてはプロジェクトリーダーを歴任している。これらは社会的に候補者の高潔性が認められていることを示す事例と言える。

**【マネジメント力】** 本学の研究改革において、より柔軟な組織と強力な研究推進の実現を目指して、従来の4研究所と複数の研究センターを、一つの部局である科学技術創成研究院に統合した。候補者は、初代研究院長として、研究分野や研究スタイルの異なる研究所群や研究ユニット、研究センターの各々の特徴を、対話を通じて把握し、研究院としての施策の企画立案と迅速な実行に活かしてきた手腕は高く評価される。事務組織運営に関しては、現場の実情把握のために数十名以上の常勤、非常勤職員と面談・意見交換を行い、研究院の教員と事務職員との協力体制を築いている。これは自らの目で確かめ、最善の次の一手を実行するという実験家としての側面が運営面に現れている好例である。研究院では、2016年からWRHI（World Research Hub Initiative）プロジェクトが始動し、海外からの研究者を東工大教員として短期・長期で雇用し、国際共同研究を推進している。優秀な海外研究者の招聘には研究院長として自ら積極的に関与し、これまでに80名を越える海外研究者を研究院に受け入れている。また、WRHI活動のひとつとして台湾ITRIとの部局間連携締結による国際共同研究を推進するなど国際連携活動を主導している。

上述のように、候補者は、教育・研究活動において極めて豊富な経験と卓越したマネジメント能力、優れた学識、誠実で高潔な人格と豊かな人間性に裏付けられた高い人望を有している。我々は東京工業大学の学長に相応しい人物であると確信し、益一哉氏を学長候補者として推薦申し上げます。

## 国立大学法人東京工業大学学長候補者の所信

学長候補者の氏名	益一哉	(自署)
----------	-----	------

本学は、優秀な理工系人材の輩出、科学技術の真理追求を通じて、学術、文化発展に貢献することで、2030年に世界トップ10の理工系総合大学になることを目標に掲げ、三島良直学長のリーダーシップのもとで教育・研究・ガバナンスの大改革が進められております。私は、2016年4月から科学技術創成研究院長の立場で本学の高水準の研究を活かして、より大きな研究拠点形成に向け、異分野融合を含む新研究領域創出の推進、外部資金の獲得、WRHI事業を含む国際拠点化の推進、研究支援体制の充実・整備に注力して研究改革推進の一翼を担って参りました。今日、改革の目標に向かた骨格はできあがりつつあると認識しておりますが、私たちの真の成功は、科学技術で新時代をリードする知の創出拠点として、各構成員が誇りを持てる大学へ飛躍することにあると考えております。本学には学生、教員、職員の自由な発想を尊ぶ文化があり、改革の目標の達成に向けて、本学の文化を前面に出して東工大らしい組織運営を進めることができると強く望まれていると思います。

私たちの大学は、これまでの伝統を踏まえつつ、「ちがう未来を見つめていく」慧眼を持ち、夢と希望に満ちた、活力あるアカデミズムでなければなりません。このあるべき姿を実現するためには、大学が学生、教員、職員にとってベストパフォーマンスを発揮できる場とすることが大切です。すなわち、現改革を継続しつつも、各構成員が自由で創造性を発揮する時間を確保し、一人ひとりが、本来達成すべき目標に向かって教育・研究活動、業務遂行に集中できる組織への環境強化が必要であると考えております。

その実現のために、私の考える新たな施策は、図1に示す通り①大学業務環境の改善・補強、②教育・研究環境改善・補強、さらに③東工大ブランドの強化について、三島学長の推進した大改革をさらに発展させることで、本学に所属する全ての構成員が最高のパフォーマンスで、個々の力を組織の力に昇華させ発揮できる場を創出することを重視します。これらの実現に向けて具体的には下記の施策を実施して参ります。

### ① 大学業務環境の改善・補強策

各自のベストパフォーマンス発揮に向けた組織環境整備のため、常に使命感を持って働く意欲が沸く職場を目指し、学長と研究・業務現場との職場懇談会の実施と組織運営へのフィードバックの実施。

### ② 教育・研究システムの環境改善・補強策

改革により増加した業務負担の軽減を含む改善策と、多様な研究スタイルを支援できる仕組みの充実のため、下記を検討する。

- 教員の教務負担の低減と学生の教育プログラム充実の両立。このために教務専門職(UEA)の導入とUEA職業務の立ち上げ。これらを種々の国際連携プログラムと連携させ、大学運営の効率的推進を目指す。
- 更なる研究の創造性と多様性の向上。研究業務の裁量性拡大による大型研究の推進力強化と若手研究者の育成。研究力強化に向けて、財務と人事の連動を可能とする研究環境の選択肢の整備。若手研究者への基盤研究費の確保。競争的資金の間接経費の獲得研究者との柔軟な運用。

### ③ 東工大ブランドの強化策

- 広報・社会連携本部を全学的に強化し、専門職の増員、各部局との協力体制の構築などにより広報活動を強力に推進。
- 東工大ブランドのプロモーション強化。

これらの施策の推進により、

- 学生・保護者に対しては、未来を創る学生の涵養・輩出の強化に向けて、既に成果を上げつつある革新的リベラルアーツ教育や、高度な専門教育を含む世界に誇る高水準の科学技術教育を提供。
- 教員、職員に対しては、誇りと意欲の持てる教育・研究・職場環境の実現に向けて、各構成員に合った多様なスタイルでの教育・研究・業務を可能にする仕組みの構築とやりがいを生む環境を提供。
- 産業界に対しては、競争力のあるコア技術を創出・体系化して提示し、アライアンスを含む产学連携体制強化。また我々を支える国に対して、世界を支える人材の輩出と産業貢献による経済効果を提供。
- 社会に対しては、学問・文化の創出を通じた貢献を果たし、全てのステークホルダーへ価値を提供できる大学を皆様と共に作って参ります。

私の大学運営の信条は、「個々の構成員のベストなパフォーマンス発揮こそが、組織目標を達成する最大のパフォーマンスを生む」ということです。私自身、複数の大学で教育と研究に従事し、基礎から応用までの研究領域をカバーする中、アカデミアと産業界との連携研究を通じて、個人の力と組織の力の両輪の大切さを深く理解して來たと自負しております。この経験を活かし、自らのトップセールスを含む、これまで以上の外部連携強化と外部資金獲得による財務基盤の強化を推進いたします。また母校同窓会「蔵前工業会」との強力な連携や、産学官とのあらゆるパイプを駆使して国内外の連携強化を図る覚悟です。これらの活動を通じて、皆様と共に『科学技術で新時代をリードする世界に誇れる東京工業大学創り』に全力で取り組んで行く所存です。

### 自由な発想による科学技術で新時代をリードする知の創出拠点

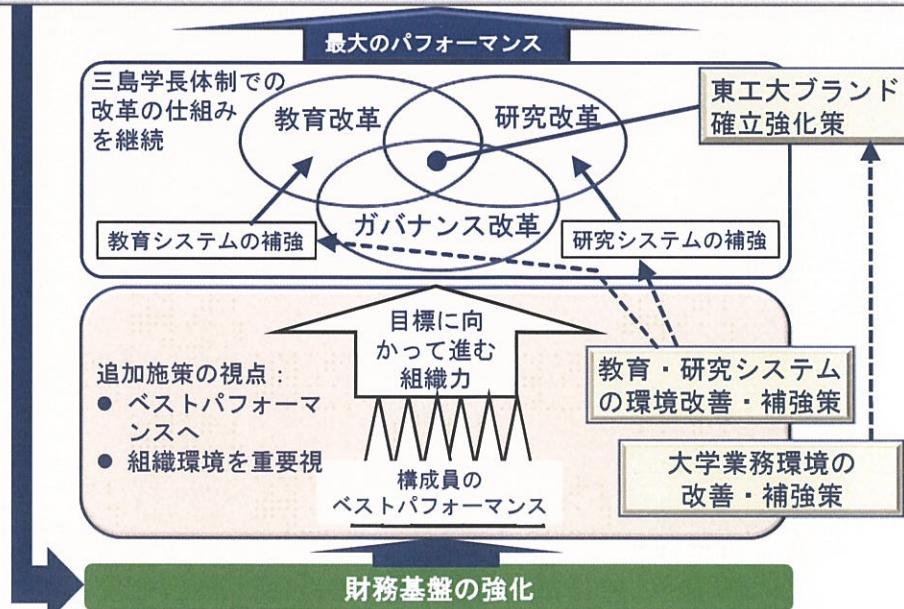


図1. 新時代をリードする強い東工大を創る施策

## 別紙様式3（第8条第4項関係）

## 履歴書

(フリガナ) 氏名	( マス カズ ヤ ) 益 一哉	(男)・女
年齢	満62歳(1954年10月生)	
現職	2016年4月 科学技術創成研究院 研究院長・教授	
学位・称号	工学博士(東京工業大学)(1982年3月)	
学歴		
年月	1975年3月 神戸市立工業高等専門学校電気工学科 卒業 1975年4月 東京工業大学工学部電子物理工学科 3年編入学 1977年3月 東京工業大学工学部電子物理工学科 卒業 1977年4月 東京工業大学大学院理工学研究科電子工学専攻修士課程 入学 1979年3月 東京工業大学大学院理工学研究科電子工学専攻修士課程 修了 1979年4月 東京工業大学大学院理工学研究科電子工学専攻博士課程 進学 1982年3月 東京工業大学大学院理工学研究科電子工学専攻博士課程 修了 工学博士(甲第1372号) Investigations of the physical properties relating to III-V compound semiconductor alloys (III-V族混晶半導体の物理的諸性質に関する研究)	
職歴		
年月	1982年4月 東北大学電気通信研究所 助手 1993年4月 東北大学電気通信研究所 助教授 2000年6月 東京工業大学精密工学研究所 教授 2000年6月 東北大学電気通信研究所 教授(併任)(~2001年3月) 2005年10月 東京工業大学統合研究院 教授(精密工学研究所兼務) 2010年4月 東京工業大学ソリューション研究機構 教授 (精密工学研究所兼務) 2011年4月 東京工業大学異種機能集積研究センター センター長(兼務) (~2016年3月) 2014年4月 東京工業大学フロンティア研究機構 教授(精密工学研究所兼務) 組織変更に伴い、 東京工業大学科学技術創成研究院(未来産業技術研究所) 教授 東京工業大学科学技術創成研究院 研究院長 現在に至る 2002年11月~2003年1月、Georgia Institute of Technology, Visiting Professor.	

## 大学・企業等の組織運営への参画状況

- 東京工業大学
  - 大学院総合理工学研究科電子機能システム専攻 専攻主任 2001 年度、専攻長 2004 年度
  - 大学院総合理工学研究科物理電子システム創造専攻 専攻長 2013 年度
  - 大学院総合理工学研究科教育委員会 副委員長 2002 年度、委員長 2003 年度
  - 精密工学研究所 副所長 2014 年度～2015 年度
  - 科学技術創成研究院 研究院長 2016 年 4 月～現在
- 東北大学未来科学技術共同研究センター研究プロジェクト評価  
(書面審査委員)、2013 年 12 月、2016 年 11 月
- エッジプラットフォームコンソーシアム ((株) デバイス&システム・プラットフォーム開発センター内) 理事長 2017 年 5 月～現在
- International Advisory Committee of KAIST Institute (KI), Korea, Committer member, 2016 年 10 月

## 社会及び学界における活動状況

1. 社会貢献 (国・地方公共団体の審議会等の委員・各種団体における役職等を年次順に列記)
  - 独立行政法人 日本学術振興会 科学研究費委員会専門委員
    1. 特定領域研究 (A) (超機能グローバル専門委員会) 2001 年度～2003 年度
    2. 基盤研究等第 1 段審査(通信・ネットワーク審査会) 2005 年度～2006 年度
    3. 特定領域研究 (ポストスケール専門委員会) 2007 年度～2008 年度
    4. 基盤研究等第 1 段審査 (電子デバイス・機器審査会) 2010 年度～2011 年度
  - NEDO (国立研究開発法人 新エネルギー・産業技術総合開発機構) 審査・技術委員
    1. MIRAI プロジェクト第 2 期基本計画検討委員会 委員 2003 年 10 月～2005 年 3 月
    2. MIRAI プロジェクト第 2 期技術開発検討会 委員 2003 年 4 月～2006 年 3 月
    3. 立体構造新機能集積回路技術開発 (ドリームチップ開発プロジェクト) 基本計画検討委員会 委員長 2007 年 12 月～2008 年 9 月
    4. 「ノーマリーオフコンピューティング基盤技術開発」に係る採択審査委員会 委員長 2011 年 8 月
    5. 「クリーンデバイス社会実装推進事業」に係る採択審査委員会 委員 2015 年 6 月
    6. その他、NEDO 関連プロジェクト採択・事後評価委員会委員など 15 件、電子・情報技術分野の技術ロードマップ作成に係わる調査委員会委員、委員長など 5 件
  - NEDO (国立研究開発法人 新エネルギー・産業技術総合開発機構) (研究開発推進)
    1. 「立体構造新機能集積回路 (ドリームチップ) 技術開発 (予算規模約 75 億円)」プロジェクトリーダー 2008 年度～2012 年度

- 総務省関係
  - 1. 電波利用料による研究開発等の評価に関する会合 構成員 2016年12月～現在
  - 2. 戦略的情報通信研究開発推進事業 電波有効利用促進型評価委員会 委員 2016年11月～現在
- 公益社団法人 りそな中小企業振興財団「中小企業優秀新技術・新製品賞（一般部門）」審査委員 2012年～現在
- 2. 所属学会（学会・協会等の主要な役職に年次を付して記入）
  - 公益社団法人 応用物理学会
    - 1. 機関誌編集委員 1995年～1996年
    - 2. JJAP 編集委員 2001年～2002年
    - 3. 理事（講演会担当） 2012年、常務理事（講演会担当） 2013年
    - 4. 副会長（代表理事） 2014年～2016年
    - 5. International Conference on Solid State Devices and Materials (SSDM) 実行委員長 2004年、論文委員長 2010年、組織委員長 2014年
    - 6. フェロー表彰候補者選考委員会委員長 2016年
    - 7. 業績賞委員会委員長 2016年～現在
  - 一般社団法人 電気学会
    - 1. 調査専門委員会等の委員（19件）、同幹事など（8件） 1998年～2008年
    - 2. 電子デバイス技術委員会 委員長 2006年～2008年
  - 一般社団法人 電子情報通信学会
    - 1. 英文論文誌（C）編集委員長 2004年
    - 2. エレクトロニクスソサイエティ 次期会長 2008年、会長 2009年
    - 3. ELEX（Electronics Express）編集委員長 2014年～現在
  - 一般社団法人 エレクトロニクス実装学会
    - 1. 理事 2013年～2015年
    - 2. 会長（代表理事） 2017年～現在

### 教　育　の　実　績

1. 担当講義（担当講義の名称、大学名、学部・大学院の別）
  - 東北大学（学部） 電気電子材料、数学物理学演習～1999年度まで
  - 東北大学（大学院） 半導体工学、プラズマ応用工学、電子音響学～2000年度まで
  - 仙台電波高等専門学校 半導体工学（非常勤）1996年度～1999年度まで
  - 明治大学（学部） 集積回路（非常勤）2003年度～2015年度まで
  - 東京工業大学（学部） 電子デバイス、集積回路（II）2001年度以降
  - 東京工業大学（大学院） 電子機能システム基礎論、物理電子システム基礎論、機能材料・デバイス・プロセス特論、機能電子デバイス I、VLSI システム回路特論、VLSI 工学（II）、VLSI Engineering (II)（英語講義）、実装工学特論、無線通信計測特別講義（寄附講義）、高周波計測特別講義（寄附講義）2001年度以降
2. 学生指導実績（2000年6月本学着任以降）
  - 学部（卒研）25名（共同指導を含む）、修士71名（共同指導を含む）、課程博士21名、論文博士4名
3. その他 大阪大学、筑波大学、東京医科歯科大学などで非常勤講師を勤める

## 研究の実績

### 1. 著書・論文（主な著書・論文を記入）

- 東北大学（1982年～2000年）では、主にCMOS集積回路プロセス、デバイスに関する研究に従事し、東京工業大学（2000年以降）では、主に高速・高周波CMOS集積回路の研究、CMOS-MEMSナノ慣性計測集積回路とその応用に従事し、現在はワイヤレスセンサネットワーク、群知能センサネットワークへ研究を展開。
  - 学術論文 142編、国際会議など376編、国内研究会学会講演685件、著書7編
1. Kazuya Masu, Kazuo Tsubouchi, Nobuyuki Shigeda, Tatsuya Matano and Nobuo Mikoshiba, Selective Deposition of Aluminum from Selectively Excited Metalorganic Source by the rf Plasma, *Appl. Phys. Lett.*, **56(16)**, 1543-1545, 1990.
  2. Kazuya Masu, Yohei Hiura, Kazuo Tsubouchi, Tadahiro Ohmi and Nobuo Mikoshiba, In Situ Observation of Electromigration in Cu Film Using Scanning  $\mu$ -Reflection High Energy Electron Diffraction Microscope, *Jpn. J. Appl. Phys.*, **30(12B)**, 3642-3645, 1991.
  3. Kazuya Masu and Kazuo Tsubouchi, Atomic Hydrogen Resist Process with Electron Beam Lithography for Selective Al Patterning, *J. Vac. Sci. & Tech.*, **B12(6)**, 3270-3274, 1994. (Invited Paper)
  4. Kazuya Masu, Kenichi Okada, and Hiroyuki Ito, RF Passive Components Using Metal Line on Si CMOS, *IEICE Transactions on Electronics*, **E89-C(6)**, 681-691, 2006. (Invited Paper)
  5. Hiroyuki Ito, Makoto Kimura, Kazuya Miyashita, Takahiro Ishii, Kenichi Okada, and Kazuya Masu, A Bidirectional- and Multi-Drop-Transmission-Line Interconnect for Multipoint-to-Multipoint On-Chip Communications, *IEEE Journal of Solid-State Circuits*, **43(4)**, 1020-1029, 2008.
  6. Kazuya Masu, Noboru Ishihara, Noriaki Nakayama, Takashi Sato, and Shuhei Amakawa, Physical Design Challenges to nano-CMOS Circuits, *IEICE Electronics Express (ELEX)*, **6(11)**, 703-720, 2009. (Invited Paper)
  7. Daisuke Yamane, Toshifumi Konishi, Takaaki Matsushima, Katsuyuki Machida, Hiroshi Toshiyoshi and Kazuya Masu, Design of sub-1g microelectromechanical systems accelerometers, *Appl. Phys. Lett.*, **104(7)**, 074102(4), 2014.
  8. Atsushi Shirane, Yiming Fang, Haowei Tan, Taiki Ibe, Hiroyuki Ito, Noboru Ishihara, and Kazuya Masu, RF-Powered Transceiver with an Energy and Spectral-Efficient IF-Based Quadrature Backscattering Transmitter, *IEEE Journal of Solid-State Circuits*, **50(12)**, 2975-2987, 2015.
  9. Kazuya Masu, Daisuke Yamane, Katsuyuki Machida, Masato Sone, Yoshihiro Miyake, Development of High Sensitivity CMOS-MEMS Inertia Sensor and its Application to Early-Stage Diagnosis of Parkinson's Disease, *Proc. the 46th European Solid-State Device Research Conference (ESSDERC)*, Switzerland, **99-104**, 2016. (Invited Talk). [International conference, Invited paper]
  10. Sho Ikeda, Hiroyuki Ito, Akifumi Kasamatsu, Yosuke Ishikawa, Takayoshi Obara, Naoki Noguchi, Koji Kamisuki, Yao Jiyang, Shinsuke Hara, Dong Ruibing, Shiro Dosho, Noboru Ishihara and Kazuya Masu, A -244-dB FOM High-Frequency Piezoelectric Resonator-Based Cascaded Fractional-N PLL With Sub-ppb-Order Channel-Adjusting Technique, *IEEE Journal of Solid-State Circuits*, **52(4)**, 1123-1133, 2017.

<p>2. 特許</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 国内登録特許 43 件（内特許公報 3 件）、米国特許 28 件（集積回路技術関連）</li> </ul> <p>3. 研究代表者として獲得した研究費</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 科学研究費補助金（基盤研究（A）4 回、基盤研究（B）2 回、挑戦的萌芽研究、特定領域研究（計画班）2 回など）</li> <li>• 受託研究（JST-CREST（1 件）、総務省 SCOPE（2 件）、NEDO 競争的資金（4 件）など）</li> <li>• 民間との共同研究等（15 社以上）、共同研究講座（2 社）</li> </ul>
<b>受 賞 等</b>
<p>1. 受賞・表彰等（特記すべき事項を年次を付して記入）</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 第 11 回電気通信普及財団 テレコムシステム技術賞（共同受賞） 1995 年</li> <li>2. STARC(Semiconductor Technology Academic Research Center、半導体理工学研究センター) 共同研究賞 2005 年</li> <li>3. 電子情報通信学会 エレクトロニクスソサイエティ賞「Si CMOS 集積回路における GHz 差動伝送線路配線に関する研究」2005 年</li> <li>4. Student Design Contest (Outstanding Design Award) in IEEE A-SSCC (Asian Solid State Circuit Conference) （共同受賞） 2006 年</li> <li>5. ADMETA2006 Technical Achievement Award （共同受賞） 2006 年</li> <li>6. 第 9 回 LSI IP デザインアワード、IP アワード（共同受賞） 2008 年</li> <li>7. 第 9 回 LSI IP デザインアワード、IP 奨励賞（共同受賞） 2008 年</li> <li>8. 電気学会 C 部門貢献賞、2009 年</li> <li>9. Best Paper Award, 34th European Solid State Circuits Conference (ESSCIRC) （共同受賞） 2008 年</li> <li>10. 応用物理学会 フェロー表彰「高速・高周波 CMOS 集積回路技術の高性能化に関する研究」2009 年</li> <li>11. 電気学会 フェロー認定、2011 年度</li> <li>12. 電子情報通信学会 業績賞「スケーラブル広帯域 RF CMOS 集積回路の研究」（共同受賞） 2013 年</li> <li>13. 電気学会 業績賞「集積回路技術の発展ならびに学会活動への貢献」2014 年</li> <li>14. 電子情報通信学会 フェロー称号「CMOS 集積回路の高速・高周波化と異種機能集積化技術への展開」2015 年</li> </ol>
<b>その他の特記すべき事項</b>
<p>1. 指導担当学生の受賞（2000 年 6 月本学着任以降）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 学部・大学院生：学内研究賞等 29 件、学外学会講演発表賞等 17 件（国内）、6 件（海外）</li> </ul> <p>2. 本学着任以降、当グループに所属した教員、特任教員の転出・昇任状況</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 助教（2003 年～2007 年在籍）は、本学電子物理工学専攻准教授に転出・昇任</li> <li>• 特任教員（2006 年～2010 年在籍）は、京都大学教授へ転出</li> <li>• 特任教員（2006 年～2011 年在籍）は、広島大学准教授へ転出</li> <li>• 研究員（2007 年～2008 年在籍）は、立命館大学助教（現・准教授）へ転出</li> </ul>

上記のとおり相違ありません。

2017 年 7 月 21 日

氏名（自署）

益 一哉

※本様式の項目に準じて、適宜作成してください。